

## 「いつか見た光景」

マーモウド A. シャラビ  
(CARE ガザ地区現地スタッフ)

あなたはデジャ・ヴを経験したことがありますか？

デジャ・ヴは誰もが一生のうち数回経験すると言われています。それは、幸せな光景を見たり、「こんな良い時が以前にもあったような…」と思い出す時に起きるものです。

しかし私の経験は、そのような幸せなものではありませんでした。

それは、2012年11月14日、イスラエル軍が“Pillar of Defence（防衛の柱）”作戦を開始した時に起きました。

テレビのニュース番組の中で、現地特派員の背後に、湾岸居住地全域への空爆による無数の煙の柱が立ち昇るのが見えました。その時、私の中で、かつてあった“キャスト・レッド（鋳込まれた鉛）”作戦時の光景が甦ってきたのです。

私は同僚と一緒にすぐさまオフィスから避難しました。戸外は、家族や愛する人たちの身に何か起きていないかと不安に駆られながら大急ぎで自宅へ向かう人々で溢れ返っていました。

自宅に辿り着いた後も空爆は続きました。自宅があるガザ地区北部は、他の地区に増して酷い状況でした。空爆は文字通り家を揺さぶり、甥たちは怯え返り、2歳になったばかりのアブドラは絶えず父親か母親にしがみついて、父か母が少しでも部屋を離れる度に泣き出します。10歳になる甥のアナスも大変怖がっています。彼がこんなに怖がっているのはこれまで見たことがありません。彼は空爆が起きるたびに体を震わせ、頭部を膝の間に押し込むのです。それは人を恐怖に陥れるものです。

5日間が経過し、家にいる子どもたちはどう対処するようになったと思いますか？

彼らは身をもって（力ずくで）対処することを学びました。

子どもたちは空爆のたびに勇ましい言葉を叫び、夜眠れるように、ありったけのエネルギーを使って遊び、明日には戦争が終わって、もう二度と爆撃ジェット機の音を聞かなくて済むように神に祈るのです。

想像してください。碎け散ったカップを。壊れたガラス片を。粉々になった花瓶を。壊れた破片を拾い集めつなぎあわせれば、壊れたものでも少しあは修復されるでしょう。しかし人間の感情は、そんなふうには元に戻せないです。だからこそ、少しでも早くこの戦争を終わらせ、人間の魂が壊れる事を終わりにしたいのです。

（以上）